

## 人間形成と住居 —建築家の立場から—

東 孝光 (建築家)

### 序 論

#### 0-1 動的な視点の必要性

住居が人間形成に及ぼす様々な影響については、早くから教育学、心理学、近年では環境論の領域などに於て論じられてきた。もし建築家の立場からつけ加えられることがあるとすれば、それは何であろうか。

まず、次の点を指摘しておきたい。それは、人間形成とか、人格形成を住居と対峙させて考えることの背景に、まず一方に或る一定した住居の構造と使われ方の対応関係を持つ場を想定し、片方ではその場に置かれた人間が、良い意味でも悪い意味でも様々な影響を受けつつ、一定の行動原則を学習し、次第に安定した生活行動のできる成熟した人格に成長していくという、一連のプロセスが成立することを前提としているように思われるのである。

しかし、永年の住宅設計を通じての素朴な実感からして、まず第一に今日の日本人の住居が、そのような一定の関係をもたらす静的で安定した構造や使われ方を持っているようには思えないのである。この実感は独り建築家だけのものではないだろう。

今日の日本人の住宅と、その内外での生活行動は、勿論両者がお互いに影響を与え合いながら、しかも速いスピードで動き変化していると捉えるべきであり、人間形成と住居の関係もそのダイナミズムの中で考える必要がある。

例えば、普通人間形成といえは青少年期に基本的なものが培われるとされ、その時代を過ごす中心的な環境としての住居の構造が問題とされる。しかしそのことを深く掘り下げていこうとすると、忽ちその構造自体が人間形成とは別の側面からどんどん移り変っていくこと、そして両親や家族の生活行動様式自体が、それに対応して時の進行の共に著しく変化していくという状況にぶつかるだろう。

また、家族の構成員としての成長した子供たちや老人などが、近い将来どのような形で同居を続けるのか、或いはまた巣立って別居するのかなど、現在の社会にまだ規範とする先例も明確には存在していない。各人が三年後、五年後にどんな暮らしをすることになるのか、これ

といった予定や予測も持たず暫定的に暮らしている家族が多い。設計の打ち合わせなどでも、なるべくどんな時にも対応し易い平面にしたい、などと相談されるのである。

勿論、過去から受け継いできた伝統的な生活様式の影響力は、家族によって程度の違いはあろうが、依然として根強く存続する部分もある。その人間形成への影響の静的なメカニズムも冷静に捉えておく必要がある。

しかしそれと同時に、揺れ動きつつある今日の住居が、まずそれを利用する成人に対して強い影響力を持ち、またその成人が住居を改善しようと積極的に住まいづくりに立ち向っている。その動き自体が、また青少年に与える環境の一部として重要な働きを持つと考えられるのである。

日本人の住居の様式が大きな変化のプロセスの真只中にある現代に於ては、人間形成と住居の関係も一方通行的でなく、これ等の動きをまず全体的に捉え、その中から望ましい方向、有効なポイントを探るという意味での動的な視点から考えるべきである。

その点に於て、建築家は日常住宅設計を通じて、現実の、動いている家族の具体的な生活行動に直接触れる機会が多い。そこに、建築家としての研究の価値や方向性が見出し得ると私は考えているのである。

#### 0-2 計画・設計のもうひとつの意味

言うまでもないが、ここで論じられるのは人間形成と住居との関係である。

まず住居について、私は次のように把握している。〈住宅〉とは、人間の住まいを内部空間を含めた物理的な実体としての側面のみで捉えた用語であり、〈住居〉という場合には、住宅が一定の内部構造を持ち、それに従って様々な影響を受けつつ人間が住むという行動をしている。その行動が意識されており、その行動の物理的な現われという側面から捉えた概念が〈住居〉であろう。

従って家具や什器が含まれていなくても〈住宅〉は成立するが、〈住居〉の場合にはそれ等が含まれ、なおかつそこに住む人間の生活の現われとして配置され、使われている状態になって初めて、その全体としての〈住居〉が現われてくる。

更に〈住環境〉という場合には、〈住宅〉の集合状態としてのや、広い範囲を把えているということと同時に、〈住居〉としての空間と物体に加えて、生活行動をしている人間の存在そのものを含めた組み合わせが、また内部の人間に影響を与えている。その総体としての側面を伝えるものを〈住環境〉として私は把握している。そして本論文でもそのように区別して用いたいと思う。

さて、一般に、建築に於ける計画もしくは設計という行為は、その建築を利用する人間の具体的な必要性に基づいて、その建築の内外での行動が支障なく効果的に行なわれるよう、空間構造を編成し、実現させる方式を組み立てるものと言えるであろう。

勿論、その建築が置かれる場所の周辺環境に対しても、より良い影響を与え、望ましい全体環境の形成に参加できるように、機能的にも美的構成の点にも留意して計画・設計を進めるべきである。

ところで、住宅、特に一戸建住宅の設計は、通常、或る特定の家族を対象にして行なわれる。しかし計画・設計の専門家が全ての戸建て住宅を個別的に<sup>いち</sup>から設計することは、量的に言っても不可能に近い。そこで、専門家が研究し考えた標準的な住宅のあり方を前提として、一般の人々はその典型に対する附加修正などの形で住居をつくるのが合理的だと考えられる。

住様式が比較的安定している時はそれが有効だろう。伝統的な日本家屋の平面が、タタミを基準として何帖という部屋の単位とその連結的な組み合わせの変化で、合理的な個別的設計と生産を永年発達させてきたことは周知の通りである。今日の工業化住宅でも、現代に通用する新しい標準平面を求め、やはりそれへの附加修正という形での設計と生産が進められている。

それでは、今日の建築家の特定の家族を対象にした個別的な取り組みには、一体どんな意味が見出されるのか。

考えてみると、明治以降の近代化、西洋化の波の中で、日本人の住様式が今日に至るまで大きく変化し、また我々も積極的に変えようと努力してきたのであった。特に第2次大戦後、封建的家族制の解体と民主化、合理的な生活改善の努力、家庭電化の浸透などにより、更に大きな変化がもたらされた。しかも、大都市の住居の殆どが戦争で灰燼に帰したということもあって、かなり短い年月の間に多数の住宅を建設し、それを通じて多くの変化を急激に国民の間に浸透させた。そして今日という時点が、まだ依然として激しい変化と摸索の真只中にある、といっても過言ではないだろう。

このような時代状況の中では、専門家が一般に行なわれている住居の使われ方などの調査研究を行ない、そこから抽出された要素によって計画された標準平面等を提案し、一般の大多数がそれにならうという方式だけでは不十分であるように思われる。

それに加えて、まず計画段階から意図的に、多くの家族が専門家の助けを借りつつ、各自で新しい生活様式を組み立てて実施し、投影された新しい住居の構造もその使われ方を専門家が生きた住環境の総体として報告し、そこからまた別の家族が要素を抽出して他に試みる。それを繰り返す中から次第に一般化の方向が現われて、今度は一般の大多数にも利用されるという方式にも意味があるの考えられないだろうか。

例えば近年の都市型住宅の設計手法の進展には、かなりの部分にその様な少数の家族と建築家などとの取り組みの結果が反映されてきたと見受けられる。

少なくとも私自身は個別の家族と建築家の取り組みの意味をそのように考え、出来るだけ設計のプロセスから結果の観察までを報告したいと努めてきた。本論でも、そのような見方からの報告を背景にして論を進めたいと考えている。

### 0-3 家づくりの学習効果

既に述べたような、住まい方の激しく大きな変化に遭遇する時代には、一般的な標準化による住居にあきたらない家族が、その数は別にしても必ず出現し、自分たちの納得する間取りやデザインを求めて設計者を探す動きが出てくるのである。

そのような特定の家族が、一部の恵まれた階層ばかりとは限らず、ごく一般的な層の中にも多数存在するのである。

ここでもう少し対象を拡げて、建築家・設計者との組み合わせだけでなく、工務店などに設計施工を依頼するものを含めた所謂注文住宅を考えると、新築住宅着工戸数の中でそれが占める割合は、依然として他に比較して著しく大きいのである。これ等の家族は、標準化にあきたらず注文住宅を望む、と一応考えられているが、実は結果としてでき上る住居が標準化からそう大きくはみ出さずわけでもない。それよりも、無意識にもせよ、間取りや細部の決定に加わりたい、そのことが結果としての満足度に大に関わるのである。

私はこれを「納得への過程」と呼んでいる。つまり、注文住宅と工業化住宅で内容に大きな違いがあるわけではなく、むしろ後者に合理的で安定した品質の点で優れた所も多いのである。しかし、個々の間取りや材料の組み合わせなどに、何故そうでなければならないか、あれこれの検討や説明、またいろいろな試行錯誤の点で、やはり前者の方が人と時間をかけて注文者につき合うことが多い。最終的には同じような結論に辿りつくにしても、また同じように実現しない点があるにしても、何故出来ないのか、色々手を尽したうえで、成る程そうなのかと納得する。この納得に至る手続き、どんな過程を辿るかの違いの集積が、満足度に響いてくるのだと私は考え

ている。

ここで重要なことは、「納得への過程」とは、期せずして計画・設計への生活者の或る程度の参加を意味していることである。

何故参加を重要視するのか。それは、生活様式が揺れ動いているからである。

例えば、経験を積んだ建築家なら、別に詳しい説明などせずとも、その家族の現状にぴったりの住宅を設計することは、それ程困難なことではないだろう。しかし、使い始めてそう日が経たぬのから、また生活様式の摸索が再開され、変化が生じることが多い、そのような時、計画や設計の結果だけを与えられている家族と、その住宅の設計の過程を或る程度設計者と共に辿った家族とでは、その変化への対応も違うし、変っていくことそのものへの態度も違ってくるのである。

そして私自身の多くの住宅設計での体験から言って、途中の過程への参加の度合いが大きい程、出来上りに対する満足度が高いばかりでなく、完成後のその住居での生活にもより積極的な取り組みがみられるようである。

そのような体験から、家づくりの計画・設計への住まい手の積極的な参加こそ、住居の完成以降の生活行動の変化に対応するための、一種の予備学習である、と考へ重要視するようになったのである。

#### 0-4 子供たちにとっての意味

通常、私たち建築家と住み手との設計打ち合わせに出席するのは、家族の代表としての夫婦のどちらか、或いは両方である場合が多い。老人や子供たちの意見は間接的にしか伝わってこないことが多いので、彼等がどの程度家づくりのための討論や学習に参加しているかは推論でしかないが、家族によってかなり違いがあるし、両親の家づくりの学習効果が、子供たちにどの程度及んでいくのかについても不確かなことが多い。

しかし間接的にもせよ、両親が家づくりに奔走し摸索する積極的な姿勢があれば、それが子供達の人間形成に何らかの形で好ましい影響を与えるであろうことは容易に予想できる。また、既に述べたように、設計過程での学習効果は必ず完成後の新しい住居の使いこなしの場面にも現われてくる。その場面での両親の住まい方の取り組みは、必ず子供たちの人間形成により強い形で関わってくる筈である。

むしろ、静的な住環境としての条件、例えば子供室の間取りや広さ、プライバシーの有無やその程度などだけを問題にして事足りるとするよりは、家全体の住まい方、使い方の摸索を通して積極的な姿で生活する両親の姿を見せるのとそうでないのとでは、人間形成の点で結果が大きく違ってしまうことは想像に難くないのである。更に進んで、時には子供たちにも意見を求め、意図的に討論

に加えたりすることが、どれだけ子供の人間形成の上で役に立つか、親たちもその教育的効果を大いに意識して行動してもらいたいのである。

繰り返すが、今日のように激しく住環境が作り変えられる状況が、今後どのような形で安定することになるかは明確ではない。しかし今の時期に人間形成の上で影響を受けて成長する子供たちが、やがて彼等の人生の或る時期に自分の家族の生活の再点検と今後の住まい方の再確認を行なうという行動を受けついでくれることは決して悪いことではないだろう。そのような形を伝えたいものだと私は考える。

#### 0-5 まとめ

本論文の目的は、まず成長過程にある子供たちの問題を中心にして、その人間形成に役立つ現代の住居とは何かを考察することにある。

そのためにこの序論では、まず現代の住居の構造及び住まい方、それらを総合しての住様式が大きく揺れ動いている時期であり、変動期の真只中にあることを指摘し、従って静的な一定の住環境条件を考えるだけでは不十分で、それを基礎としつつも、動いていく住環境と、それを動かした支えている家族の生活行動そのものも住環境の重要な一部として捉え、その人間形成への影響の望ましい姿をも併せて考えるべきであろうと強調した。

特に住宅計画・設計から建設へ、そして完成後の取り組みなどに、建築家・設計者の助けを借りつつ住み手が行なう生活学習の効果を意識し、家族の家づくりへの参加が予備訓練として重要であり、直接・間接にそれが子供たちの人間形成にも役立つのではないかと予想したのである。

考えてみれば子供が両親によって与えられた環境によって深く影響を受けるのと同時に、両親もまた子供の存在及びその人間形成に関わるることによつ、より深く自己の人間形成にも重大なよのを受けて更に高い位置へと人格を作りあげていく。その点でも人間形成は一方通行ではあり得ず、巣立った青少年がまた自己の家庭で同様の関係を繰り返していくであろうことと併せ考えれば、住居と人間形成の問題は生涯的な過程の中で捉える必要があると考えられる。

そのような観点に立ちつつ、以下の章では過去及び現代の住居内で、人間形成に深く関わっていると思われる点について考察を進めたい。

### 第一章 家づくりの過程から

#### 1-1 私の住宅設計への取り組み

論を進めるにあたって、私がどんな背景から住宅設計を始めたかとその後の経過について簡単に前おきをして

おきたい。

私が住宅設計を始めたのは1960年代の後半、東京オリンピック開催後の、まだ住宅ブームたけなわの頃であった。それから70年代のオイルショックの時期を経て今日の1980年代に至る20年近い期間、主として独立住宅の設計監理に従事してきたのである。

私が住宅設計に取り組むようになった直接のきっかけは、1966年に東京の都心で塔状のコンクリート小住宅を自分の家として最初に設計したことで、それ以後、都市の中の狭い敷地、高密度の都市的な環境に建てる、所謂立体的な都市型住宅なるものを数多く手がけることになった。

同時に、その頃の私の考え方の根底には凡そ次のようなことがあった。

近年、建築技術が発達すればする程、建築設計も高度に専門的な立場に立つことになり、結果的には素人に対して一方的な環境設計陥り勝ちで、その環境を使い生活する例の個別的な希望やこだわりや癖といったものを吸収して設計に反映させる方法が見失われつつあるような感があった。いやそれどころか、そのような個別性を排して、出来るだけ一般性のある合理的な設計を良しとする風潮が強いのではなからうか。

そのことに私は或る種の不満を抱くようになっていた。何故ならば、合理性は否定出来ないが、個別性を排除し過ぎることが、何か建築の表現的な活力を失なわしめたり、また生活者の生々とした使いこなしにつながり難くなり、結局は人々の環境に対する関心や愛着を得られず、早々に改造や取りこわしの運命につながっていく、ということになってはいはしないか、と考えたのであった。

そして一度、その環境を所有し、使用する生活者との直接的接触によって設計の行なえる戸建て住宅の設計から何らかの方法を学びたい、と願ってこの道に入ったのであった。

またそのような動機から、出来上った住居を家族がどのように使い、またどのように使いながら作り変えていくかに興味を持ち、出来るだけ完成後も接触を続けて観察するようにしてきたのであった。

ちなみに私の戸建て住宅の設計例は1966年の塔の家以来1984年迄に約110戸であり、決して多い数ではない。ただ、各住宅の住み手、特に夫婦たちとは住まい方についての話を聞き、こちらの考えも述べて討議の上で住環境を組み立て、それもこちらの摸索も色んな形で示しながら、設計の過程をなるべく共有するようにし、そして完成後の利用状況を観察し、見守ってきたわけである。その点では、詳細なカルテをつくる医師の臨床記録に近いものかも知れない。その集積の中から、人間形成と揺れ動く住環境のダイナミクスを探ろうというのが本論の目標のひとつなのである。

## 1-2 居住空間としての連続感

このような背景と手続きを経て生み出された私の戸建て住宅での設計経験から、人間形成に関係する所が大であると考えられる点を幾つか挙げてみたい。

一番の問題として私が感じていることは、家づくりの中で居住空間としての家全体の一体性、連続感が失われていくことへの危惧の念である。

近年、日本人の住様式の中で個人の意識が強くなり、個室を求めることが多くなって、そのために住居内で部屋相互の独立性が高まり、閉鎖性が強くなる傾向がある。その上、都市化の進行で住環境が過密化し、住宅相互のプライバシーが問題となり、住居の全体が近隣に対して閉鎖的になる傾向も著しい。この両者を合せて、住居の空間構造の内外の閉鎖性が問題となってきている。

しかし、実際に私たちが、住み手と直接話し合いながら、生活の色々な場面を一緒に点検してみても、そんなに各部屋を細かく区切る必要は出てこないのである。

一応、個室は別としよう。個室の確保は、戦後の日本の住居の合理化、民主的改革の中での大目標のひとつであった。両親の寝室は当然として、子供部屋を含めた個室こそが、人格を育てるものという意味で重要視され、それ等を居間や食堂から切り離して独立させようという動きが著しかったわけだ。

しかしそのことと、残りの居間食堂、台所、そして廊下階段などの交通空間を含めて、部屋を用途別に区切るということとは、また別の話である筈のものが、つい区切ってしまふ。居間は来客を通すから、食堂は台所とひと続きでは雰囲気が悪い、台所の方も片づけ物が見えない方が良く、廊下やホールは冷暖房の効果が落ちる等々、たしかに区切るための理由には事欠かないわけである。

その結果、家屋の構造が廊下や階段ホールに結びつけられた部屋の集合とう形に近づきつつある。これは人間形成の点でかなり困った現象だと感じている。

私は冒頭に居住空間と書いたが、この場合狭義に解釈して個室以外の住居内生活空間という意味である。私は個室以外の住居内生活空間は、できるだけ連続性をもたせ、一体感をつくり出すべきだと考えている。また事実、私の設計する住宅で80%以上が、居間食堂は勿論、そのまわりのスペースを含めて個室と水廻り以外の居住空間はドアをつけない一続きのものになっている。

かつてこんな事を考えた。家の中心に大きなテーブルがひとつあればよい。夕食後のひと時、父親が新聞を抜け、子供が学校の宿題を持ち込み、お母さんは編物でもするか、家計簿をつけ始める。お互いは何も話さないし、一緒のことをしないでいるが、ただ何となく同じ場所でめいめいが勝手に過している。これが「だんらん」の一番自然な形ではないだろうか——と。

もっと話を進めれば、家の中のあちこちに家族が散ら

ばっていても、お互いがお互いの生活行動の気配を感じ合い、何らかの調節をしながら過ごしている。これが家の中での生活であって、それさえあれば、ことさらに「だんらん」の場とか、意識的な行為などは不必要かも知れないのである。

### 1-3 子供部屋は区切るべきか

先に連続性の点で個室は別、と一応断わっておいた。しかし実はこの場合、寝室も子供室も区別なく、果して明確に区切って良いものかどうか、大いに問題を感じていることは、建築家も世の多数の両親たちと同様なのである。

子供室の問題で一番はっきりしていることは、子供の成長過程に応じて、ということであろう。幼稚園前の女の子二人を、造りつけの2段ベッドにして両親の部屋の1階に低い洋服ダンスで軽く区切って置いたケースがある。まだ一人で寝ることが出来ないんです、と仰言のお母さんの説明をそのまま、建築化したのである。但しこの住居では、家中に吹抜けや中庭が各所にあり、将来、必要になれば部屋のローテーションや室内の増築で調節しましょうという話し合いがあり、事実その通りに姉妹が高校の頃に吹抜けの一部を埋めて個室を二つ作った。

また、別の家族では小学校一、二年の腕白小僧たち三人の男兄弟で、お母さんから、いつも部屋ですもうをとったりしているけれど、個室を作って身の廻りのことなど自分でさせるようにしたい気持と、兄弟で一緒に遊んだり、けんかをしたりする共同生活の良さも棄てきれない気持とがあって迷っている、と素直に打に明けられた。そこで考えて、大部屋の中に、子供たちが閉じたり、開いたり出来る簡単な部屋のユニットのような装置家具を作ったりした。

このユニットは子供たちに大好評で、中学生の頃まで愛用してもらったが、やがて勉強が忙がしくなり、大部屋を区切って個室にした。その場合も廊下側が南に面していたこともあって、ドアと廊下に面した壁をガラス貼にし、ロールブラインドで遮へいするようにしたが、お母さんにも中の様子がわかるし、たいへん良かった様である。ある時訪問して様子を見たら、ガラスの所にお母さんへの手紙と、その返事のメモが並んで貼ってあるのがほ、えましかった。

私は、基本的には子供部屋のしつらいは必要最小限度にして、止むを得ず作っていくという後追いの程度でも良いのでは、と感じている。

その場合、場を与えるということと、部屋を与えるということを区別して考えて欲しい。子供の場合は比較的早くから与えてやる方が良いだろう。その場所を自分で守り、自分で整えることから自我が育っていくだろう。しかし、早くから壁で区切った部屋を与えることは、かえっ

て場所を自分に帰属させるための方法、自分の場をつくり出すことの意味などを身につける力が発達しないのではあるまいか。

### 1-4 生活の場をもっと子供に開け

居住空間の閉鎖性を問題視したが、もともと居間や食堂は共用の場としてしつらえられていて問題は少ない。それよりも、台所、水廻りが問題である。

これは建築家にとっても予算の点もあって頭の痛い問題だが、台所の広さを十分とって、親子で一緒に料理が作れるだけのスペースのある方が、調理用の豪華な設備が整うよりも、どれだけ重要なことかと思う。

この場合にも部屋の広さと共に連続性が問題で、母親の調理の手元が目の前に見えていれば、自然に興味が出て、自分にもやらせてという風に進んだりするのではなかろうか。

水廻りにも同様の問題があるかも知れない。私たち専門家は、どうしても場所の十分とれない所を、設備器具の便利さで補なおうとするが、それでは補えないものもある。例えば、父親と子供が洗面所で並んで歯を磨くとか、親子で風呂に入ることのスキンシップはTVコマーシャルで教えられなくとも誰しもが感じているところなのだが、親子でゆっくりくつろげる浴室の広さがなかなかとれず、また二人で並ぶ洗面台のスペースがとれないことが多いのである。

私の家は建坪が小さく各階ワンルームの塔状の家で、中間に水廻りだけのフロアがある。そこでも狭いので浴室とトイレ洗面を兼用にし、ついでにドアもつけずカーテンだけで区切った。新築の頃は一人娘が小学1年だったので、用を足すのもお互いにオープンで、家内だけがカーテンを使った。時には私がトイレの前にある階段の踊場の前に坐って時間待ちをして娘と多少の会話を交したりした。長ずるにつれてお互いに遠慮するようになったが、トイレや風呂場での親子のつき合いというものが大切であることを実感した。スキンシップは何も直接肌を触れ合うことだけではなく、お互いが肉体と心を持った動物として、共に暮らすことの意味と方法の学習ではなかろうか。

建築家としては、このような場合、いつももう少し居住空間の絶対値を広くすることで、いろいろな仕掛けを試みたいという欲求に駆られている。しかし、通常、住み手は予算を考え、坪当りの標準単価で割って大体延床をどれ位と、用途をつけたうえで設計の相談に来られる。そこで止むを得ず、広さによって得られる豊かさ、重要性を説いて坪当り単価を切り下げて広さの広に廻すことになる。建築家の設計がいつもローコストにならざるを得ないのは、こんな所からでもあるのだ。

### 1-5 無駄な空間、屋根裏、床下など

建築家は、片方では住居を安全で効率よく使えるよう合理的・経済的に組み立てるべき責任を住み手に対して負っている、と同時にもう一方では、たとえ小規模な住居といえども、実用一点張りではなく、そこにひとつの意味のある空間の組み立て、ひとつの小宇宙を創り出したと、いつも願っている人種なのである。

だから、あまり廊下や階段からの距離を短かくすることばかりを考え、部屋と部屋をコンパクトに結びつけ、そして遮断性の良い壁で区切るなどを繰り返して平面や断面を余り合理的に詰め過ぎると、いつも途中で仕事が息苦しくなってくる。

そして住居を人間形成に役立つべき環境という目で見直す時にも、この宇宙性というかひとつの構造的な組み立てを考えないで、効率や合理性一辺倒であった設計態度に対する反省の必要が痛感される。

宇宙性とか構造とまでいかなくとも、かつての住居が持っていた、薄暗い所、無駄な所、危い所、怖い所などの意味をもう一度考えてみる位のことが必要ではないだろうか。

例えば、昔、私たちの少年時代には、家でいたずらをして叱られるとよく押入れや蔵の中へ入れられたものだが、今は収納スペースはあっても悲しいかなモノが一杯でそんな余裕が無い。しかし子供たちが、怖い所、気味が悪い所などの空間体験をせず成長して、果して良いものかどうか。

また余裕といえば、犬や猫を飼ったりする余地としての縁の下、スズメやネズミなどがごそごそしたり、時には蛇が潜り込んできたりした天井裏など、なんとかつての住居は色々な小動物を抱えた小宇宙であったことか。

かつて、住居の中で手洗いのあたりは寒くて薄暗い場所と相場が決っており、子供にとって夜、手洗いに立つことは怖くて嫌なことであった。それに比べて茶の間や台所には火やぬくもりがあり、皆が集まってにぎやかで、家族というものの意味を文句なしに肉体的に教えてくれる。そのような明と暗、表と裏の構造が見失われてしまうことが、子供の人間形成と無縁とは思えない。谷崎潤一郎はそれを日本的な空間と規定したが、今やむしろ人間的と言うべきかもしれない。

そして最近、屋根裏や地下室が住居の中で話題となり始めている。直接的には空間利用の点でのことだろうが、その背後では住居空間の余裕がもたらす陰影や明暗の効果を、人々が意識していないとは言い切れないのである。

## 第二章 人間形成への効果

### 2-1 働かせてもらえない子供たち

時代が変り、人々の生活も動いていく。そのことを強

調した後で、昔の生活が良かったと徒らに嘆いてみても仕様がないただろう。

しかし、或ることが存在しなくなって初めて、それが果していた役割りに気付くということが多いのも事実だ。そのような意味で、この章では主として行動の面から、これまでの住生活の中で人間形成に役立っていたと思われることを取りあげて確認しておきたい。

アジア地域を旅行していて、何か眼に引掛けて気になる感じがあるのだが、最初それが何だか判らずに妙な気分であった。途中ではっと気付いたのだが、それはもう日本ではすっかり見られなくなってしまった光景——子供たちが街頭で、家の内外で働いている姿であった。

それは私などの年代の人間にとっては、大へんなつかしい光景でもあった。少年時代、私自身も同年代の子供たちと同様に、家業の手伝いや簡単な家事の一部、使い走りなどをよくやらされたものであった。

むしろ、これ等の外国で見かける子供たちが働いている光景は、何か日本の社会が失ってしまったものを思わせる。それは、子供たちが簡単な作業の習熟を通じて、次第に大人の世界に成長して入り込んでいく、その重要かつ不可欠な過程を示している。

今日の日本では、労働基準法や児童福祉法があり、子供たちが不当に酷使されたり、強制的に厳しい条件の労働に追いやられることから守っている。しかし、それだけでは全く不十分である。大人の厳しく優しい眼が行届くなかで、子供たちにも仕事を与えてやる。そこに何か爽やかで健康な社会の仕組みのあるべき姿が見えないだろうか。

しかしいづれにしても、家庭内で、家族の各人が互いに協力して必要な作業を分担し合うということまで禁じられているわけではない。むしろ、外での子供たちの労働に制限があるとすれば、家庭内でのそれは残された貴重な機会として捉え直すべきではなからうか。

特に私たち建築家の立場からすると、住まいの手入れや維持に関する仕事の一部を、親の注意深い見守りの中で、積極的に子供たちにも分担させてやって欲しい。そのことが、人格形成の上からもどれだけの教育効果があるか、もう一度考えて欲しいのである。

ただ、私たちの側にも反省すべき点がある。今日の住居のつくりには、専門家の点検や維持管理によりかかって成立している所が少なくなく、それがともすれば増加する傾向にあることが問題だ。また、一寸した窓ガラスの拭き掃除や外壁の手入れなど、安全な足場が用意されているかどうか、設計の段階でもっと注意深く考えられるべきだ。設備器具などにも、素人の点検修理で済む部分とそうでない部分の仕様を明確にするべきだろう。

## 2-2 生活に触れていない子供たち

しかしこのように考えてみると、仕事をさせてもらえないばかりでなく、今日の子供たちは果して住居内でのトータルな生活そのものにすら触れる機会を持ち得ているかどうかと、心細くなってくのではないか。

何よりも子供たち、特に学校教育を受けるようになってからの彼等は、あまり長時間を住居内で過ごすことが出来ない。学校での勉強の時間が長いばかりか、塾やクラブ活動などを入れると、会社に勤めている父親と殆ど同じか、場合によってはそれ以上の時間を家の外で過ごしている。日曜日などに遊びに出かける頻度と合わせ考えれば、父親を確実に越す子供も多いことだろう。

このような子供たちにとって、家は食事と寝るための場所だけでなく、それ以外に家族と接し、お互いが一つ屋根の下で暮らすための調節やルールなどを身につける機会としてのあり方が少なくなっているのではなからうか。

まず第1に、その点で親の直接的な保護の下に住居内で比較的長時間を過ごす乳幼児期の子供たちの住居の影響力が、相対的にこれまで以上に重要度を増すだろう。

しかし、幼稚園や小学校へ上る頃になってからの子供たちが、初めて空間の構造に気付いて興味を持つようになり、その成り立ちの仕組みを解き明かそうとする。この学習もまた人間形成のうえで欠かせないものであり、機会に恵まれまい、放置して成人に至ることは重大である。

その点で、第2に、学校教育に於ける住教育が、これも以前以上に重大性を帯びてくるだろう。建築家もこの問題に大に関心を持っているが、カリキュラムの中には是非、住環境に関する教育プログラムを組み込み、家庭と連携して学習を進めさせてもらいたいものである。

## 2-3 親の働く姿を見ない子供たち

忙がしい子供たちと同様、家にあまりいない会社勤めの父親のことに触れた。

都市への人口集中とスプロール現象によって、都市の通勤圏が著しく拡大し、会社に通う父親は朝早く家を出て夜遅く帰宅する。仕事の場と住まいの場が決定的に分離している家庭が多いのである。

そのことは、二重三重の結果を生む。まず、あまり家に居ない父親は住まいのことにに関して積極的でなく、発言も少ない。傍観者的になる傾向がある。

そして住居が殆ど母親によって維持運営される状況の中で子供は育てられる。

現在住居の維持管理が殆ど家庭内の女性によって支えられていることは重大である。彼女たちは、少々の大工仕事や電気設備の修理まで、これ迄男性の仕事とされていたことまでやってのける必要がある。子供たちの工作

の相談にも乗ってやらねばならない。

女性の負担が大き過ぎるだけでなく、転換期以前の家庭科教育で不十分な住環境教育しか受けていない。問題のあるメンテナンス・フリーや道具の自動化を望む声にも無理からぬ部分もあるのだ。

もうひとつ、父親の働く姿を見ていない、ということとは父親を通じて社会と接し、生きていく大人の姿から何かを学ぶ機会を持ってないことを意味する。

私は、住居は家族のための私的な空間であると同時に、それが社会に触れる最初の接点でもあるべきだと考えている。戦後、封建的な身分制度との関連で家族の住生活を犠牲にした接客偏重が戒められた。しかし、家族の間に人を迎え、これをもてなすことは、人間が社会生活を営む上で不可欠のことである。より一歩進んで、人と交わり、交渉し、取引きをしながら生活を立てていく姿から学ぶ所は大きい筈である。

住居から仕事の間が離れ、純粋な憩いと再生産の機能だけが強調され過ぎている点を考える必要がありはしないか。少くとも、住居が余りにも排他的になり、プライバシーのみを求め、閉鎖的になり過ぎることが、この点でも人間形成上疑問視されるのである。

住居内で行なわれていた両親や成人家族の社会的な生活行動は、完全に無くなってしまったわけではなく、その代替物として色々な活動が住居の周辺で行なわれている。学校や近隣での各種のバザーやパーティ、ボランティア活動、文化サークルなどは、家庭内では行なわれることが少なくなった近隣とのつき合いの代替であろう。とすれば、意識して子供たちの人間形成のちめにそれを接するように仕向けたり、参加させたりするべきかも知れない。

もうひとつ重要なことが残されている。核家族化によって、子供たちが家庭で老人に接する機会が少なくなったことだ。老人と日常的に接するなかで、生活の知恵や物事の歴史的な背景や、そして大人の眼、大人の見方というものを折に触れ具体的、即物的な形で学習することが出来た。三世同居も再認識されつつあるが、何らかの代替的学習行動も考えられないものだろうか。

## 2-4 プライバシーという牢獄の子供たち

このように、家の中で過ごす時間が少くなり、父親や老人の姿も見当らず、家事に明け暮れるかパートタイムで不在の母親、といった住居の中で生活的な学習効果のことを考えるのが大変心細いものとなった。

その上で、プライバシーばかりに気を使った子供のための個室は、まるで牢獄である。

或る時、四方山話の未受験勉強時代の思い出を語ってある学生がこう述懐したことを思い出す。——何とか大学に受かって欲しい。そのために勉強に集中している

かどうか、閉め切った部屋のドアの向うで母親が気を配ってウロウロしている姿が臉に浮かんでくると、いくら厚い壁とドアで仕切られていつも、プライバシーなんかゼロに等しいものでしたよ、とその学生は話すのであった。

子供たちは、普通、夢中になると集中力があり、また音楽を流しっ放しにしたりして、自分の空間を作り出す術にはたけているものだ。プライバシーが必要なのは、むしろ狭い空間にひしめいて暮している他の家族との間に、という場合も多いだろう。

核家族で夫婦に子供が1人か2人という今日の状況では、プライバシーが本当に必要なのは夫婦ぐんかのための寝室だけかも知れず、また子供の部屋だけを閉じるのが一番効率的な場合もあるだろう。

しかしプライバシーの必要性だけから子供を部屋に閉じ込めるのは考えものだ。それよりも、子供の場を与えるべきである。早くから自分の場を与え、その場を自分で管理させる具体的な例については前章でも述べた。

むしろ自分の場を如何にして自分の力でつくり出すかを学ばせる方が良いのだ。また私自身の例で強縮だが、塔の家では子供の部屋も夫婦の部屋も平等にドアがなく、娘も私たちも彼女が小学校1年から大学卒業迄、何の支障もなく過せた。

勿論、子供がステレオをかけてやかましい時は親が抗議したし、深夜来客で私たにが騒がしくしている時は、娘がたまりかねてやんわり文句を言いに来たこともある。お互いに、お互いの生活を考え、時には文句を述べ、時には思いやって我慢する。それが住居内での生活そのものであり、人間形成の見地からしても、個室の壁によって守られるものと、失なわれるものがあることを知るべきであろう。

#### 2-5 モノをつくる現場を知らない子供たち

職住の分離が大き過ぎるため、住環境の周辺で父親どころか、人が働いている姿が余り見られず、特に人々が集まって何かを作っている場所が住居のまわりに少なくなった。

そのことを、私たちの住宅工事現場での体験から却って痛感させられるのである。

私たちがつくる住宅の現場だけは、それこそ住宅地から離れるわけにいかず、結局、住居の近くで子供たちが人が泥や屑にまみれて働いている場所をのぞくことの出来る殆ど唯一のものになったらしい。

私は、小中学校教育のカリキュラムにそう詳しくはないのだが、例えばどンドン工場などへ出かけてものを作っている場を見学させることがどれだけ教育的かと思う。

何よりも、建築現場の中へのぞきにくる子供たちの眼

の色が違うのだ。彼等がどんなに興味を持っているかは、自分の少年時代を振り返ってみてもよく理解できる。そして、興味を持たせることが、教育の第一歩ではなかったらうか。

残念ながら、今日の工業化社会は専門化、分業化によって高度に発達させることが出来たわけだ。従ってひとつの商品の製作も、あちらこちらで分割して作られ、それが集合して一つにまとめられる。その過程を一番素朴に見せてくれるのが建築現場だ。今日の建築現場は安全管理が厳重になっていて、不用意に設計者が現場を訪ねても、すぐには入場を許されないことがあったりする位だ。だから子供たちの現場学習にも問題点は沢山あるだろうが、是非教育に取り入れて欲しいもののひとつなのである。

### 第三章 幾つかの新しい可能性

#### 3-1 生きた空間体験の場を

もう20年近くたつが、1966年に新宿駅に地下広場が竣工した時のこと、私は設計監理の担当者として地下広場の開通に立合っていた。公共広場なので、早朝だったと思うが時間を決めて一斉に使用開始にしたのだった。地下の広場に立って、さあどんな人たちがこの広場に（地上の階段入口から）降りてくるか、と待ち構える当事者たちの前に、ワッと声を挙げて走り降りてきたのは、一群の中学生たちであった。

子供は空間に一番敏感であり、積極的に、自分の肉体を物指しのように使って、未知の空間を体験し、それを味わい、自由に使いこなすことでそれを征服しようとする。

このような空間の体験が、具体的にどのような人間形成に関わりを持つのかは興味ある研究課題ではあるが、ここでは、いずれにせよ、より豊富で変化に富んだ、そして何よりも実際に使われている、生きた空間を子供たちに体験させてやりたいと、建築家としては願っている。

それは何もドラマチックな空間だけが有用だと考えるわけではなく、出来るだけ違った種類の空間体験をさせる中で、環境に対する豊かな反応を呼び起させたいのである。

そのためには住居の内部空間だけでは不十分であり、それを基点として、その周りに平生馴れ親しんでいる一つの生活領域があり、更に複雑な都市空間へとつながっている連続的な環境を体験させてやりたいと思う。

私の少年時代の体験にもあったことだが、子供は或る時期、冒険の旅に出たいという強い衝動に駆られるものである。結果的には道に迷うことが多くて大騒動になるのだが、身の廻りの空間から外の世界が一体どうなっているのだろうかを確かめたいのである。

安全とか規律とかいう名のもとにこの衝動をそのまま封じ込めたり、一定のルートだけを行動させて、向うに見える道に乗り出すことを禁じることを、現代社会は結果的に子供たちに強いてはいないだろうか。暴走族の肩を持つ気はないが、思いのままに街路を走り廻って、都市の構造を肉体的に自分のものにできる快感は十分理解できる。

### 3-2 住居以外の環境も考える

かつての都市に於ても、子供は住居のみならずその周辺の街の中で生きてきた。

今日、子供が住居の中で生活的な行為を行う度合いが減ってきているだけに、余計に住居以外の環境の意味が人間形成のうえでも浮かび上がってくるのである。

そのような点では、まず保育園・幼稚園から始まって小学校、中学校、児童館など、子供のための教育環境こそ、真先に豊かな空間体験の場のすべきであろう。

豊かなという意味は、何も豪華ということではない。建築家の立場からいうと、色々な種類の空間を味わえる場が複合されている、ということだろうか。このことは、住居に於ても当然求められてよいのだが、残念ながら今日ね住居は核家族化によって規模が限られている。住環境に於ける空間の複合化は、近隣との住宅集合の中で求められねばならないだろう。

再び教育の場に戻るとして、例えば、天井のうんと高い所と低い所、広い所と狭い所、域いは明るいサンルームや全く人工的な環境まで色々あって良い。それ等が、或る秩序のもとにそれぞれの特質を失わず構成的に連結されていること——このあたりからは建築論の領域なのでこれ以上は差し控える。また設計によっても豊かさの意味は色々あって良いだろう。

また、子供たちの人間形成のために与えてやりたい空間体験は、何も建築のような人工的環境だけとは限らない。もっと自然の環境にも接するよう、当然カリキュラムの中で考えられるべきであろう。

### 3-3 そして豊かな住環境教育を

過去の住居と生活の中で、かって人間形成に関連していただろうと思われる要素の幾つかについて前節に於て考察し、それが失われたことに対する代替的な行動についても触れた。

この章では、現代の住居に於ける新しい可能性を探るために、まずその基礎として、住居内にこだわらず、住居とその周辺を含めた環境の全体に、豊かな空間体験の場を用意することを強調したわけである。

考えてみると豊かな空間の体験とは、それと仕組まれた豊かな空間そのものから得られるものだけではないだろう。過去の街や村の建築とその外部の環境は、子供の

人間形成のために仕組まれていたわけではない。人間が生きて、生活していくための懸命の姿と、その投影としての環境が形成されていたに過ぎない。

私が強調したいのは、住居の内外だけの空間体験だけでは、生きている、生活している人間の姿が部分としてしか見えず、また投影されていないのでは、という危機であった。

私は前節で保育園や学校での環境の空間体験の重要性についても触れたが、問題はそのような個別的なそれぞれの場所での、種々の仕組まれた空間体験だけでなく、それ等を通しての人間が生きている環境全体の成り立ちを、少しでも理解させるような体験の大切さを言いたいのである。

こゝ数年、学校教育のカリキュラムの中の住環境に関する部分を、もっと充実させようという認識が広まり、各方面でその研究が進められている。私はその一番基本的な動機づけとして、教育環境自体の中に豊かな空間体験の場を用意することの重要性をまず指摘する。そして次には、何よりも生きている空間、人間が生活している姿に総体的に接触させるカリキュラムを意識して組んでもらうことを主張したい。分業化と専門化によって成り立っている現代社会に於ては、人間形成の時期に、環境の全体を見渡し、その中での個人が、どのように生きているか、空間がどのように使われているかに直接的に触れて体験させること、これが真に豊かな空間体験の内容でなければならない。

### 3-4 建築の専門分野での可能性

大学の建築学科で3年又は4年の設計課題に住居の設計を与えているが、大へん興味深い学生の反応が見られる。

いずれの場合も、市街地の中で自分で設計したいと思う敷地を選定することと、その中での家族の規模を与えて最大限具体的に生活内容を想定し、描写することを草案批評の第一日に行なわせている。そして、学生たちが考えてくる住み手の職業の想定が、殆ど自由業、画家、音楽家、文筆業から映画俳優まであって、商業や会社勤務があまり出てこないのは、働いている父親に接していないため、その住居に於けるイメージが描きにくいからであろう。母親に関しては大ていが専業主婦でパーティ好きの想定が多いのは、子供としての願望がこめられているようである。

近隣に関する現地での観察が、道路に接する部分に集中するのは、実際に使われている敷地なのでそれ以外は観察が困難なので止むを得ないが、その後の設計過程の中でも近隣に対する細かな配慮や問題提起が少なく、防衛的な配慮ばかりなのも、彼等のこれまでの住居での貧弱な体験に裏打ちされていると見てよいだろう。草案の

批評の大半は、近隣との間にどんな共用空間を生み出す可能性があるかの論議に割られることになる。

私はこの住居の設計課題を、住居の設計の演習というよりは、自己の周辺の環境に注意を払い、そこから何を学ぶかの演習と考えている。そのうえで建築学科の学生としてもう一步進めてそれを踏まえつつ創造的な居住空間設計に発展させることを指導しているつもりである。この場合の前段階は、建築学科の学生に限らず、全ての生活者に必要な訓練であり、家庭内でのそれが不足しているとすれば、意識的にどこかで行なわれる必要があると考えている。

しかし一方では、学校教育の中での住環境に関わる部分があまり充実されておらず、またその部分を担う教員に対して十分な知識と訓練がなされて来なかったことが指摘されている。その点は今後大いに充実すべきであろう。しかし現代のような転換期に於ては、この動きつつある住環境の形成に直接、接触を続けている建築家や専門家が、適宜学校へ出かけて住まいの生きた知識や体験を子供たちに伝えることも必要ではあるまいか。

それぞれの地域に住む住居関係に関わる専門家が（ボランティアも可能だろうが）、分担して学校を訪問し、逆に自からの工事現場や製作工場での見学会を行ったりする、青少年を対象とした地域活動もあるのではないだろうか。

### 3-5 何よりも親の家づくり、生活の姿を

これ迄、主として成長期の後半の子供たちを頭に描いた考察や提案を行ってきた。人間形成の早い時期が乳幼児期にあることからすると、小学校以前の、これ迄とそう変わらず家庭内で育てられている時期の子供たちの問題が残されている。

私の設計した京都の保育園では、園長の保育方針から3才、4才児に保育園での生活学習を試みておられる。実際の調理器具を使って、湯沸しから簡単な料理までを行なわせたり、洗濯、お掃除などをやらせるのだそうである。この園では運動場の片隅に動物舎があって、こゝで兎やにわとり、山羊などの飼育の一部を子供たちに行なわせている。

ままごとではなく、大人が使う器具や出来るだけそれに近いものでも、一寸した補助の台などを与えれば、子供たちは懸命に、そして興味を持って行なうそうである。

こゝで再び、住居内に於ける両親や家族の他の人間の生きる姿に直接、触れさせることの意味がもう一度思い返されるのである。

私の考えでは、特にわざわざそのために考慮されたものよりは、大人が住居の中で生活する生の姿に直接触れさせ、また時には〈小さな大人〉として可能な限り生活行為に参加させることにこそ、より大きな効果が望まれ

ると感じているのだが如何であろうか。

## 第四章 新しい住居設計のダイナミズムを求めて

### 4-1 生涯的な人間形成を捉える

人間形成の問題を現代の視座から捉えなおすという観点から、住居の中で両親の庇護のもとに育てられる幼少年期だけで考えることの限界について、これまで様々な角度から触れてきた。

しかし、過去の住環境に於ても、単に幼少年期の人間形成のみで事が足りていたわけではなく、青年期から成人への移行期に於ても引き続き同一の住環境に留まるか、他に移ったとしても職住一体が多いために、ほゞ同様の住環境の中で周囲からの訓練や影響によって、移行がスムーズに行なわれ、次第に成熟した成人へと育つのが社会的存在としての人格形成への過程であったと考えられる。

現代に於ても、人間形成を巾広くかつ長期間の中で捉えてみれば、学習の場が住居だけに限らなくなったというだけで、状況にそう変りがないとも言える。むしろ、住居内に於ける人間形成の重要性のみを強調することで、却って他の場と期間の重要性を結果的に低く見ることになったり、忘れ去る結果となることも戒めるべきである。

そのような目で、もう一度現代の子供たちの人間形成の全行程を見返してみよう。

まず、乳幼児期の人間形成の重要性は、一番基本的なものであり、住居が与えるであろう影響の大切さは繰り返し確認する必要がある。それについてはこれ迄にも専門分野での研究と問題点の指摘があるし、私の建築家としての体験もそう多くはないことから、本論では触れていないだけである。ただ、働く両親のための保育施設の整備が急務であることは周知の通りであるが、その施設に住環境としての配慮が必要であることは、私の保育園設計の経験からも痛感されるところである。

同様に重要な問題がそれ以降の時期にもある。まず小中学、高校の時期には、現代の住居が担い得ない部分が多くあることをこれ迄に指摘した。住居の改善充実と共に、幼稚園、小中学校、児童館等々の教育施設の中に、巾広く生活的、住環境的な要素が考慮されるべきであろう。

この場合、生活的、住環境的な要素とは、保育園に於ける調理の学習の試みで触れたように、単に学校教育の環境の質を上げるというだけでなく、食堂や調理と飲食などの行為そのものを学校の中で充実させるとか、教師以外の人格との触れ合いの機会を増やすとかの点を含めては、と私は考える。

次に大学に進んだり、社会人として過す初期の時代、

家庭を離れての独身生活になることが多い。これ迄、その時代は一時的なものとして看過されていることが多いが、これ迄に述べたような全過程の中では依然として人間形成の途上の大切な期間であり、下宿、独身寮、またワンルーム・マンションなどに住居の延長としてどんな点を充実させればよいか、研究と計画上の反映が今後大いに望まれるところである。

それも単に施設としての充実だけでは不充分であることは明らかであろう。たとえ生計の上では独立しているにしても、まだ人格形成上は十分自立しているとは言えない若ものたちである。やがて成人として本格的に自立して生活する際の、環境に適応し、それを作り変え、その中で自己を育て生かしていく生活上の技術や姿勢を身につける方策、つまりは独身生活学とでも言うべき体系を整備して与えてやりたい。今後に残されている大きな課題のひとつではないだろうか。

#### 4-2 家づくりの過程への参加

前節に述べたような過程を経て、やがて成人となった夫婦が、暫らくの期間を過ぎた後に、やがて自分たちの家づくりを行なうことも、また人間形成の過程の上での重要な節目として捉えるべきである。

建築家としての設計過程での観察からみても、新しい家づくりに積極的な取り組みの場合には、独立してからのそれまでの生活の再点検が無意識、或いは意識して行なわれている。その上で、これからの生活のあり方を摸索する。重大な問題については、子供の意見も引き出し話し合う、そのことの子供の人間形成への寄与の可能性については既に述べた。

この時、建築家の役割が大切である。住環境に対する学習の効果という点から考えるならば、建築家にとっても、住宅設計は単に住まい手のその時点での希望を如何にうまく解決し設計に取り入れるかというだけでは不充分である。むしろ、その先を見通して、より良き方向に導ける可能性まで含まれていることが望ましい。ただそれも、建築家が出来る可能性の中はそう大きくはないし、また建築家が直接的にそれを住宅設計の中に織り込むというのではなく、住まい手に対して問題を投げかけ、彼等が具体的な将来の問題として意識し、予備的に学習をし、彼等なりの解決として現在どのようにしておくかの一応の結論を出させる。その時、むやみに性急な結論が必要なわけではなく、将来の変化への対応の可能性（空間的な要素だけでなく、自身の対応の中という点でも）を残しておけばよいという助言などを与えることが専門家の大切な役割だと考える。

このような観点からすると、成人に達し、結婚し、家族を形成してしばらくという時点での家づくりは、勿論成人としての生活行動の開始でもないが、しかし結論と

しての家づくりでもない。そのいずれでもない生涯学習の中の一つの重要な節目である。そこにこれ迄を振り返り、これからの生活の方向を定める一種の健康診断とリハビリテーションとしての姿が見えてくるのであるのではないだろうか。

#### 4-3 総体を捉える住居設計学のあり方

これ迄の建築、特に住宅設計のあり方は、まず一般の住まい手の生活があり、それを研究者や建築家が調査・分析を通じて一つのおぼろげな典型的平面に作りあげ、その有効性を専門領域の中で検討して次第に一つの標準的平面（に代表される標準的空間構造）にまとめ上げていく。そしてその結果を新しく作られる個別住宅の場合には設計者が家族の希望や方針に従って部分的な附加修正で個別の設計に作り上げる。また集合住宅の計画では、専門家がその標準に従って集合計画の空間構造に馴染ませつつ、何種類かのバリエーションで実施していく。更に、特別に経済力があつたり、また変則的な住まい方を行なわざるを得ない家族が、建築家などと相談しながら例外的な設計をつくり、実施するというように考えられ、行なわれてきた。

この場合、〈計画〉とは、そのような実際に行なわれている住生活から採集され、標準的空間構造に使われるべき要素の抽出と、その組み立てを研究的に行なう側面を言い、〈設計〉とはそのような要素と標準的空間構造を背景として、その家族の個性による微修正、調整という側面を指しているのではないかと考えられる。つまり〈計画〉に於ては一般性が重要視され、〈設計〉に於ては個性がより評価される傾向を持っているのである。

私が住宅設計の経験の中で、前述のような個々の家族の学習効果に思い至るようになったのは、そのような一般の要素の抽出と専門家による組み立てには、今日のように住環境のあり方が動いている時代には住み手にあまり強いインパクトを与えないか、または受動的な生活につながる傾向が強いと思われるからであった。そして幾つもの設計経験から、直接自分たちが学習して結論に近づく方式が、以降のとり組みにもより良い結果をもたらすことに気付いたからでもあったのである。

そこで、個々の家づくりに於て、過去の彼等の生活様式の点検から有効な条件、要素の抽出、その設計への適用、そして今後の生活へと、或る程度の計画から設計へのプロセスを個別的に辿り、結果としての生活を見守る。その総体としての住み手の生活する姿こそ、生きている住環境であり、住空間なのである。

その点、近年住宅計画研究の分野で住まい方の調査研究が盛んになってきていることは建築家にとっても大へん興味深い。更にそれを進めて、調査の結果をそのまゝ、専門家の手で一般的な要素に抽出して適用するのでな

く、——まず個別の調査を各家族自身に行なわしめ、直接その結果を新しい住居の設計に反映させ、そして以降の使い方への影響を見守り、相互の関係を研究する。そこから見出されるであろう一般的な条件を、より広く住まい手に新しい学問体系として提供していくという——つまり人間が自己の環境をつくり、影響を受け、また作り変えて生きていく総体としての姿、プロセスをこそ科学的な追求し、理論化して多くの生活者の利用に資するという方向が考えられないであろうか。これが、私が建築家として考える、新しい調査・計画・設計・追跡・調査、そしてその全体像の科学的研究という新しいダイナミクスによる学問的方向の提案である。

#### 4-4 今後の課題と展望

このような新しいダイナミクスによる住居設計学の今後の方向性については、独り建築計画の領域でのいわゆる工学系の専門家、研究者、そして現実の生の生活行動記録に触れる建築家、設計者たちの力だけでは不十分なものに終ることが明らかである。今後、当然心理学、社会学などの人文系の関連の分野に於ける研究成果との交流が大いに望まれる。

というよりはむしろ、もう既に他の分野で意識され研究されている方法や成果を、私たち建築計画・設計の領域により積極的にとり入れるべきということでもあろう。

と同時に、建築家としての実感から最後に申し添えたことは、美学、哲学の存在が、総体としての人間の生活を把握する際にはより重要性を帯びてくるであろうことである。

例えば住宅設計な於ても、住まい手自身の生活の方向性を決める際に、過去の点検や新しい知識の学習の直接的成果だけでは決定的なところに迄至らず、最後には必ず「それでもこうしたい」「やはりこうしてみたい」という、生き方の全体像に関する把握、つまり生きるための信条や哲学とでも言うべきものが必ず頭をもたげてくるのである。

また、家づくりを通じて得られるものも、結局はそのような生き方に対する新しい認識や確信といえるようなものに収斂してその人の人間形成の中に留まっていくかのようであり、それが以降の生き方にもより広い範囲で反映していくのである。

また「美しさ」の問題でもそうである。美的なことが、実用的なことが全て満足された上で求められる余裕の産物ならば、住宅設計の中でそれが求められることはかなり稀なことになるだろう。実際には全くそうではなく、余裕の無い、精一杯の生き方、住まい方の中の方がより切実に住み手が「美」を求める場合に会って驚かされる。そのことを、私は数多くのローコスト住宅の設計

の中で実感した。当然のことだろうが、「美」と「哲学」がこゝでも隣り合わせで存在することを、極く普通の住まい手から教えられることが多いのである。私はそれこそ、住まいの姿の総体的な把握には欠かすことの出来ない骨格だと強調しておきたいと思う。

人間形成の問題は独り子供から成少年の問題であるばかりでなく、生涯を通じての人間の問題であるという観点からそれと住居との関係について論じてきた。むしろ、子供を育て、人間形成に役立つ環境や行動を支えてやろうとする成人の行動そのものが、またその人にとっての重要な人間形成の糧となる。「負う子に教えられ、」は立派に生きている。「住居」や「住環境」は、そのようなこだまの中で捉えるべきであろうともう一度強調して、本論の結びとしたい。